

線審(ラインジャッジ)の心得

東京都中学校体育連盟バドミントン部 審判委員会

線審についての基本的な考え方、やり方を以下に示しました。内容を確認し、公正なジャッジをしていただくようお願いします。

<基本>

- (1) シングルスとダブルスでサイドラインが異なるので、種目に合わせて椅子の位置を変える。
- (2) サイドライン、バックバウンダリーライン、ダブルスの時はロングサービスラインが線審の担当するラインとなる。(センターライン、ショートサービスラインは主審が判定する。)

<姿勢>

両足の裏を床につけて、背筋をまっすぐにして座る。肘をモモに乗せて前傾したり、背もたれにのけぞったり、足を組んだりしない。

<心構え>

- (1) ジャッジは自信をもって素早く出す。
- (2) トラブルは、主審の判定より線審の判定の方が多いので、主審より線審の方が楽だと思わず、一打一打に集中する。
- (3) きわどい判定ほど早いジャッジをした方が選手も納得しやすいので、素早い判定を心がける。

<公認審判員規定より>

- (1) 線審は担当ラインについて全責任を持つ、ただし、もし線審が明らかに間違った判定をしたと主審が判断して、線審の判定を変更する場合を除く。主審による線審の判定の変更は、線審の元の判定より優先されるものとする。
→主審が線審の判定を変更する時は、「コレクション・イン」(「インに訂正します」の意)または「コレクション・アウト」(「アウトに訂正します」の意)とコールする。
- (2) シャトルがコートの外に落ちた時は、どんなに遠くても、直ちにプレーヤーと観客によく聞こえるように、はっきりした大きな声で「アウト」とコールし、同時に主審がよくわかるように両腕を水平に広げて合図する。そしてすぐに主審を注視すること。
→明らかにインであっても合図する。右手はコート内下方に向けて指す。左利きの人も左手は使わないこと。
- (3) シャトルがコート内に落ちた時は、線審は無言で、右手でそのラインを指す。そして、審判を注視すること。

- (4) シャトルの落下点が見えなくて判定できなかった時は、両手で目を覆って主審に合図する。
→選手のシューズなどの陰で見えない時がある。また、選手がシャトル追って、迫って来たら椅子ごと避けて落下点を見るとよい。
- (5) シャトルがコート面に触れるまでは、コールや合図をしてはならない。
→先にコールや合図をしてしまうと、片方のプレーヤーに教えていることになる。
- (6) 常にコールや合図をするべきであるが、フォルトに関する主審の判定に先行するコールをしてはならない。
→例えばシャトルがプレーヤーや着衣に当たったり、ラケットに当たったりした時など、いかにそれが明らかであっても、主審の判定に先行するコールをしてはならない。

※ 2本のラインを担当する場合やダブルスのロングサービスの場合、シャトルが落下するであろうと思われるラインの方向に、体を動かして、シャトルを見て判定をする。(線審が2人の試合では、サイドラインとバックバウンダリーラインの2本を担当するので、判定するライン上に目線がくるように一打一打ごとに頭を動かしてジャッジする。また、自分の担当するラインのジャッジのみをするので、コーナーに落ちたシャトルを判定するときに、当然バックバウンダリーラインとサイドラインの線審が異なるジャッジを出すこともある。(二人の線審が異なる判定をしても、どちらかの線審がアウトとコールすればアウトと分かるので、自分の担当ラインがインであるなら、インの合図を出すこと。)

※ シャトルがコートに着く時、最初にコート面に確実にシャトルが触れたところで判定する。
体(目線)を低くして見て判定をする。

<注意>

- (1) ダブルスの試合で相手側のコートのサイドライン・ポスト付近に落ちるシャトルはポストが陰になって見えづらいこともあるので注意する。
- (2) バックバウンダリーライン付近に落ちる速いスマッシュやプッシュはアウトをインと見間違ふことが多いのでしっかり落下点を確認する。
- (3) 選手から質問があったときは、返答せず、「主審に言ってください」という意味で主審の方へ手を向ける。

<その他>

- (1) インターバル中はリラックスしておく。線審の様子確認の為、主審がアイコンタクトをしてくることがある。
- (2) 線審は、主審が審判台にいる間はコートから離れないこと。